

プラトンの『クラテュロス』における「名前の正しさ」

中 澤 務
（北海道大学）

1 従来の解釈の視点

クラテュロス篇は、プラトンが言語の問題を主題的に取り上げた唯一の対話篇である。対話は、ヘルモゲネス及びクラテュロスという二人の人物を相手にしてなされている。両者は「名前の正しさ」という問題に対して相反する見解（「規約説」・「本性説」と呼ぶことにする）を抱いており、ソクラテスは彼らの見解を反駁していくが、彼の反駁の論点が一体どこにあり、そこからいかなる彼自身の見解が浮び上がってくるのかということを見てとるのは容易ではない。従来、この「名前の正しさ」という問題は、名前とそれが指し示す対象との間に成立する関係はいかなるものかという問題として捉えられ、プラトンもこの問題意識の中でクラテュロス篇を書いたのだと考えられ

ることが多かった。したがって従来の解釈は、概して、クラテュロス篇の中心的問題を、ものと名前との関係が本性的なのか規約的なのかという点に見ようとした。⁽¹⁾

確かに、対話篇冒頭におけるヘルモゲネスとクラテュロスの論争の中心問題はそこにあつた。しかし我々は、ソクラテスもこの議論の枠組みの中に完全に取り込まれていると考えるべきではない。というのは、彼ら二人は確かに、名前と対象との関係に関して真つ向から対立しているが、しかし、にもかかわらず、根本的な点で発想を共有しており、ソクラテスは、まさしくそこを問題にしているからである。では、両者の共有する発想とはいかなるものだったのだろうか。

2 ヘルモゲネスとクラテュロスの共通点

彼らの共通点は、以下のようにとめられる。

第一に、彼らは「名前の正しさ」という問題を、音声の形や綴の形といった「名前の形」と「事物」との関係（これを「関係Φ」と呼ぶことにする）として捉えている。彼らの規約説・本性説の対立は、もっぱら、この二項関係を巡るものである。

第二に、彼らは、そのような二項関係に関して対立しているだけではなく、そこから名前の使用についての誤った主張を導き出している。まずヘルモゲネス説を見てみよう。ヘルモゲネスは、「それぞれのものに本性的に定まっている名前は存在せず（384d6-7）」、「誰かが何かにどんな名前をつけても、それがそのものの正しい名前になる（384d2-3）」と主張する。国名で呼び名（名前の音声的な形）が異なるというものが、その根拠である（385d7-e3）。そして彼は、名前の形を規制する、事物の本性は存在しないという理由で、各人がものを勝手な名前前で呼ぶ（*καλεειν*）ことができる⁽²⁾と主張するのである（385a1-d1）。ヘルモゲネス説において、規約という公的な要素が何ら積極的な役割を果たしていないことは、よく指摘される通りである。ヘルモゲネスの立場は、音声の形の恣意性を、もの—名前関係の恣意性と混同し、名前の使用を規制する要素を関係Φという視点のみによって理解したところから生じている。他

方、クラテュロスは、関係Φが本性的なものとして成立していると考え、それを根拠に、名前は、この関係Φにおいて本性的な関係が成立する限りにおいて、名前である（名前として機能しうる）と主張する（383a4-7, 429b12-c5, 431e9-432a4）。したがって、名前によって何が指示されるかは、名前の中に含まれた情報によって一意的に決定されてしまうことになり、誤った呼名は呼名でさえないことになるのである。このように、彼らは問題を関係Φという視点のみから理解しており、これによって、我々が名前を誤って使用することがあるという事実を説明できないという共通の困難に陥っているのである。

私は、ソクラテスがこれら二つの考え方の論駁において問題にしているのは、関係Φについての彼らの相反する立場の当否というよりも、むしろ、そこから彼らが不当に導き出している、名前の使用についての以上のような誤った理解なのだ⁽³⁾と考える。ソクラテスは、名前ともの間の関係という静的な事柄のみを問題にしているのではなく、むしろ「名前を使う」という段階まで含み込んだ、全体的で動的な事柄を問題にしているのだと考えられるのである。以下、このようなかたちでの「名前の正しさ」がこの対話篇においていかに展開されているのかを考察する。

3 ヘルモゲネス批判における「名前の正しさ」

従来、「名前の正しさ」に対するプラトン自身の考え方が最も明確に読み取れるのは、ヘルモゲネスに対する批判の箇所(386e4-390e4)であると考えられてきた。この批判の中で、ソクラテスがある種の本性的な「名前の正しさ」を主張していることは確かであろう。しかしその本性的な正しさは、関係Φにおいて成立するものではないように思われる。みずからの説を提示するにあたって、まずソクラテスはプロタゴラスの相對主義に反対し、事物には固定的(本性的)なありかた(*ousia*)があると主張している(385e4ff.)。ここだけから考えると、彼はそのような本性を反映するような関係Φの成立を「名前の正しさ」として主張しているように見える。しかし我々は、ソクラテスがこのような事物のありかたから「働き(*ergon*)」のありかたに論点を移し(386e4ff.)、このレヴェルにおいて「名前の正しさ」を考察しているという事実注目しなくてはならない。彼によれば、例えば機械をするためには、道具として梭が必要であるが、それは勝手なかたちをしていてよいものではなく、織るという「働き」の本性に合致し、それをうまく成功させるようなものでなくてはならない。そして、名前もこれと同様であり、それによってある目的を果たすための道具である以上、「名指し(*onoma*)」という「働き」の本性に合致し、

その目的を果たすのに最適なものでなくてはならないのである(387b8-d9)。

彼はこの目的を、388b10-11において、「(1)それによって互いに何かを教えあい、また、(2)ものを、それがいかにあるかによって区別すること」と規定し、プラトンの本性的な本性説はこの名前使用の目的との関わりの中で展開されている。この目的は、従来、実在の分節の把握、及びその分節の伝達という哲学的な目的として理解されることが多かった⁽³⁾。しかし、このソクラテスの言葉からそれを読み取ることはできない。この解釈は、名前の目的として(2)に重点をおき、そこから(1)を理解しようとする。しかし、(2)はその後の議論の中心にはなっていない。実際に展開されるクラテュロス説に対する反駁の議論(377a ff.)においては、哲学的なレヴェルにおいて名前がいかに実在を分節しているかを問題にしてはおらず、むしろ、日常的な名前の使用を問題にしているのである。したがって、(1)(2)の中では、(1)の方がむしろ重要であり、それは(2)とは区別されたものとして理解することができる。つまり名前とは、まず何よりも、我々がそれによって互いに考えを伝達する(つまり、コミュニケーションをおこなう)ためのものなのである⁽⁴⁾。

したがって、問題は、この目的を満たすためにはいかなる条件が満たされるべきなのか、というところに存していることになる。この条件は従来、クラテュロスの理解されることが多かったが、しかし、それを明確に示唆するようなテキスト上の

証拠は見あたらない。ソクラテスは、名前制作者であるノモテテスは、この目的を目指して名前を作るのであり、これを果たしうる名前が正しい名前であると述べるにとどまっている。この箇所で強調されているのは、名前の形とものとの具体的な関係というよりも、むしろプラトンの「名前の正しさ」全体の概略的な成立機構なのである。ここで重要なのは、これがコミュニケーションという名前使用の普遍的な目的との関わりの中で理解されているという事実なのであり、ソクラテスは「名前の正しさ」が、単に名前の形とものとの間に成立する二項関係において問われるべきであると示唆しているわけではないのである。

したがって、その後説明されている対話家（ディアレクティコス）の役割も、言語の改変⁽⁵⁾という点にあるとは考えられない。対話家は、ノモテテスの名前制作を監督する役割を担わされている。それは、対話家が実際に名前を使用する者だからであり、名前が上記の目的を果たしているのか否かを直接判定できる立場にいるからである。⁽⁶⁾この対話家の役割は、プラトンの「名前の正しさ」を理解する上で重要な意味を持っていると思われるが、その役割が理想言語の制作といったものであることが示唆されているわけではないのである。

以上のように、この箇所のソクラテスの説明だけからプラトンの「名前の正しさ」の具体的な姿を完全に明らかにすることはできない。実際ヘルモゲネスは、この説明のあとでソクラ

テスに「名前の正しさ」の具体的な提示を求めているのであって、この概略的な説明の意味は、その後のクラテュロス説批判の中で具体的に明らかになっていくのだと考えるべきであろう。⁽⁷⁾そこで次に、クラテュロス説批判の意味について考察することにしよう。

4 クラテュロス批判の視点

クラテュロス説批判を解釈する上で鍵になるのは、一体ソクラテスはクラテュロス説の何を批判しているのかということである。これを理解するためには、我々はまず、クラテュロスがなぜ虚偽不可能論を主張するのかを明らかにする必要がある。

ソクラテスは、クラテュロス説の吟味を始める前に、長大な「語源分析」の議論（391d4-427d2）をおこなっている。この議論は、クラテュロス説の具体的な展開であると考えられるが、ソクラテスは、分析が、名前の最小の単位である「最初の名前」に到達した後も、これを音素にまで分解していき、クラテュロス説を徹底化させていく。そして、これによって議論は「表示（*synajia*）」という概念に到達することになる（422c ff.）。この *synajia* という概念が名前の表示機能に密接に関わっていることは、後の批判におけるこの言葉の使われ方を見れば明らかである（cf. 435b3, d2, d8, 435a2, b2）。すなわち、長大な「語源分析」の議論を経て、クラテュロス説が究極にま

で押し進められることによって明らかになるのは、名前の表示力の唯一の源泉を、名前に含まれる情報の力に求めるといふ、クラテュロスの根本的な発想なのである。虚偽不可能論は、この発想を名前使用の段階に適用することによって生じている。

ソクラテスが語源分析の議論を延々とおこなう理由の一端はここにある。ソクラテスはまず、クラテュロスに気に入るようなかたちで彼の説を具体的に提示していく。そして、その展開の中で、クラテュロス説の本質が次第に明らかになってくるのである。ソクラテスが「類似性」という概念を持ち込むのは、この本質を先鋭化させるためにほかならない。⁽⁸⁾

このように理解すると、ソクラテスが虚偽不可能論を強力に主張する理由も見えてくる。そして、この虚偽不可能論を問題にすることによって、ソクラテスは、その根底にある発想そのものを問題にしようとしているのだと考えられるのである。

虚偽不可能論に対する批判において、まずソクラテスは、名前とものの結合が関係Φ以外の要素によって生じうることを明らかにしている。彼は肖像画の場合を例にして議論をおこなう(430e3-432e6)。彼によれば、肖像画とそのモデルは、単に類似性のみによって結び付くわけではない。類似性ということとは無関係に、誰かがそれを結び付けるという行為をおこなうことによつて、両者は結びつくことが可能である。したがつて、肖像画がだれの肖像画であるかということを決定するのは(つまり、両者の結び付きの原因となるのは)、肖像画の中に含ま

れている類似性という性質ではなく、むしろ、それを結び付ける人の意図と深く関わっていることになる。

次にソクラテスは、第二の論点として、実際に名前が使用される場面を持ち出す(434d9-435d1)。我々は、クラテュロス説の基準から見れば誤った名前を使つて、コミュニケーションを成功させることができる。したがつて、名前が関係Φを満たしているか否かということは、我々がその名前を正しく使えるか否かということとは無関係であることになる。

以上のように、関係Φにおける本性的な関係という基準は、我々の実際の名前使用を説明することに対して、そもそも見当違いをしているのであつて、名前使用のありかたに対する理解を根底から見誤っているのだと考えられる。⁽⁹⁾したがつて、クラテュロス説は、その根本的な発想を批判されているわけであり、たとえクラテュロス説に修正を加えたとしても、それがプラトンの真意となることはないであろう。したがつて、むしろ我々は、クラテュロス説に対する批判の中から、プラトンの真意を紡ぎ出していくべきなのである。

5 クラテュロス批判における「名前の正しさ」

まず我々は、クラテュロス説において完全に無視されていた「名前の使用者」を考慮に入れる必要がある。クラテュロスの陥つた虚偽不可能論から抜け出すためには、使用者がものと名

前を結び付けるという段階を認めなくてはならない (cf. 429c6 ff.)。では、このとき使用者の結び付けに真偽の区別を与える基準を、ソクラテスはどのように考えているのであろうか。この点においてソクラテスは、ノモテスによる結び付けという規約的な要素を考慮に入れているように思われる (430a6-431e8)。名前はその中に含まれた記述や類似性などの情報によって対象を指定するのではない。むしろ、そのようなものとは無関係にノモテスは特定の音声と特定の対象を結び付け、対象に対する指示を固定するのである。名前ともとの繋がりは、ノモテスによって規約的に「慣用 (ἔθος)」あるいは「取り決め (συνήθημα)」によって (435a9-10) 言語共同体の中に保持される。これら二つの結び付けのレヴェルは異なったものであり、ヘルモゲネス及びクラテュロスの考え方が見落としていたものである。言語の使用者がコミュニケーションをおこなうとき、使用者はノモテスによって与えられている慣習的な結び付きに従っている (435a5-b3) が、彼はこの慣習的な結び付きに従いつつ、自らがその使用において、実際に結び付けをおこない、それによって互いにその思いを交換する。したがって、結び付けには、慣習によって与えられる段階と、実際の使用にあたって使用者がおこなう段階との二段階があることになる。

ソクラテスはこのような名前使用を、「私が名前を発声するとき、私がかのものを思つており、私がそれを思っていること

を君が認識すること (434e6-7)」と定式化している。ここには、すでに成立している結び付けに従うという視点 (cf. 435a7) の他に、「当の音声に結び付いている『もの』についての『思い』を使用者自身が何らかのかたちで所有しているという、新たな視点が登場している (cf. 435b6)」。すなわち、名前を使用する者達がそれぞれ、名指されている対象についての何らかの理解を所有していることなしには使用者自身の結び付けは成立しないのであり、したがって伝達は成立不可能なのである。このように、議論の進行にともない、慣習の与える名前ともとの関係が規約的であるという事実と共に、我々が実際にそれを使用するとき我々はものについての何らかの理解を抱いており、それを相手に伝えようとしているのだという、コミュニケーションの事実が明らかになっていく。問題はこの理解の地位である。というのは、ソクラテスの説明においては、それはいまだ、「思い」にとどまっているからである。私はこの問題が、続く435dから始まる「ものの探究」の議論において論じられているのだと考えたい。

6 「ものの探究」

この議論においてソクラテスは、「ものの探究」の重要性を強調している。この議論は従来、ことばと事物探究との対立図式として理解されてきた。だが、我々はこの議論をそれまでの

議論の流れの中で理解することができる。すなわち、この議論においてソクラテスは、我々が名前を使っていく上で不可欠なもの、その理解が、いかなる仕方でも獲得されるかを問題にしているのだと考えられるのである。この議論で批判されているのは、名前の中に刻み込まれた何らかの情報が我々に対象の理解を与えてくれるのだという、クラテュロスの考え方である(435d1-9, 436a1-2, 438c1-4)。そして、ソクラテスが事物の探究を強調するのも、このクラテュロスの名前との対立においてなのである。ここで問題になっているのは、言語の使用者が対象に対する理解を獲得するのはどこにおいてかということである。クラテュロスは、名前の中には対象に対する完全な理解が含まれており、それを盲目的に信頼することによって対象に接近することができると考える(435d4-6, 436a1-2, 438c1-4)。これに対して、ソクラテスが問題にしているのは、この情報の地位である(436b5-11)。ソクラテスの論点は、名前に情報が含まれているとしても、それは知識ではなく信念なのであり、結局我々は自分で探究をおこなうことによって、対象の理解を獲得しなくてはならないということなのである(437d8-439b9)。クラテュロスの考え方によれば、名前を獲得することはすなわち対象理解を獲得することにほかならない。ソクラテスが批判しているのはこの考え方であり、彼は両者が別の事柄であることを強調しているのである。

7 「名前の正しさ」とソクラテスの探究

以上のように見ていくと、ソクラテスは「名前の正しさ」という問題と、事柄そのものの理解を求める哲学的探究を対立させているのではなく、むしろ結び付けようとしているのだということができようであろう。というのは、言語の使用者がいかなる名前を使おうと、対象に対する正しい理解が形成されない限り、伝達はうまく成立しないのであるが、しかしこの理解は使用者がみずから獲得すべきものだからである。

我々が名前を使えないということを意識するのは、伝達という目的を、その名前によって果たせないうときである。そして、そのような事態が生じるのは、名前の中に対象のあり方がうまく反映されていない時ではなく、それを使う者が、対象についての理解を十分に持っていないときなのである。クラテュロス批判で明らかになったことは、慣習は当の対象が「何であるか」についての理解を与えてくれるわけではないということであった。そのような理解は、我々が自分の力で探究をおこなうことなしには獲得できない。しかしそれを獲得しない限り、我々は名前を「正しく使う」こと、すなわち、コミュニケーションという目的を果たしていくことはできないのである。

ところで、先に考察した「名前の正しさ」の概略的な説明において、ソクラテスはノモテテスの名前制作の監督を、名前の

使用者である「對話家」に委ね、両者の関わりの中に「名前の正しさ」の実現を求めていた。このことの意味は、以上のような図式を考慮に入れるとき、はじめて明らかになる。ソクラテス的な對話は、對話者の間に、「徳」や「正義」といった名前に対する共通の理解が得られていないところから始まる。そこでは、名前は共有されているが、しかしその対象が何であるかの理解は共有されていないのである。このとき、ことばを使う者は、事柄そのものに対する理解が欠いている。そして、名前を実際に使う者の中にこのような理解が形成されない限り、彼は、当の名前を使ってもその目的を果たすことは出来ない。というのは、名前は、その外面的なかたちを補正することによってではなく、対象に対する正しい理解と結び付けられることによって、正しく使えるものとなるからである。「名前の正しさ」を支える主体が、事柄そのものの探究をおこなう「對話家」で

あることの意味は、ここにあるように思われる。對話家は、事柄そのものの探究をおこなうことによって、「名前の正しさ」を支えていくのである。

このように、クラテュロス篇におけるプラトンの目的は、単にことばの問題を哲学の問題と切り離して論じることでも、ことばの価値そのものを否定することでもなく、ディアレクティケーという営みの役割を、ことばの正しさを支えていく主体として、ことばという側面から明らかにすることだったのである。

注

(1) これまで提出された代表的な解釈については、cf. Bestor 329-330 (p. 10)。

(2) この主張においてヘルモゲネスは、名前を付けることと名前を使う(名指す)こととの間の区別をしていない。そして、ヘルモゲネスに対する第一の批判(385b-38c)において、ソクラテスは「名前の使用を問題にしている。この批判は、「名前の真偽」を問

題にしているということ、注釈家達の批判の対象になってきた。しかし、この批判の中でソクラテスは、言明 (*λογος*) の真偽に依存するかたちで、名前の真偽について語っている (cf. 431b5-c1, 432e4)。したがって、ここでいわれている「名前の真偽」とは、何らかの言明を行うときに使用される名前なのであり、結局、その使用に成功したり失敗したりすることなのだと考えられる。

(3) e.g. Kretzmann 128, 中畑 78-89, 103-105. 両氏はいずれも、もの分節構造の正しい把握のうちに、「名前の正しさ」の成立を見ているように思われる。それに従えば、正しい名前とは、ものの分節を正しく反映し、その分節に本性的に対応した名前ということになる。しかしこのような解釈は、現在の箇所以外にテキスト上の根拠を持つてはおらず、これがクラテュロス篇全体の中でどれほどの重要性を持つのか疑問である。たとえば Kretzmann は、この目的と、いわゆる「分割法」との関連に注目するが、クラテュロス篇において「分割法」が示唆されているとはいえない。cf. Schofield 61-2 (n. 2).

これに対して、中畑氏は、この箇所の議論の論点が名前の「使用」を巡っていることを見て取っており、そこからプラトンの「名前の正しさ」へのアプローチを試みている (中畑 78-89)。そこで氏は、この「使用」を「実在の分節構造の把握と伝達 (cf. 104)」のうちに求めているが、しかし、ここで問題になっている「名前使用の目的」が、実在の分節構造の伝達という哲学的に限定された意味におけるものであるか否かは、必ずしも明らかなことではなく、したがって、この論点と分節構造の把握という論点が必然的に結合するとは思われない。

(4) 考えの伝達といっても、さまざまなレベルがありうる。日常的なコミュニケーションと、(哲学的な)対話が異なったものであることは明らかであろう。私は両者を同一視すべきであると語っているのではない。ここでプラトンがおこなっているのは、まず、名前の基本的な機能を、このような「伝達のための道具」

という視点から捉えることである。プラトンはこの視点を提示し、「名前の正しさ」の成立の場をそこに定位したうえで、対話家の役割を、この場に決定的に関わるものとして提示している。しかし、その役割とは、単にコミュニケーションをおこなうことではなく、後に明らかになるように (第7節)、むしろそのコミュニケーションの基底を保証することなのである。

(5) e.g. Weingartner 20-21, Williams 91-92.

(6) 理想的な対話家とソクラテスは一致すると考えられることが多い。しかし、両者を同一視することはできないように思われる。ソクラテスは、アナロジイの中で発生した、「慣習 (*νόμος*)」 (cf. 386d12-e2, 429b4) の擬人的表現として理解できる (cf. Kretzmann 128, Silverman 39)。これに対して、対話家は、終始、名前を実際に使用する人間として描写されている。実際、対話家が「名前の正しさ」を判定しうるのは、まさしく彼が作る者ではなく使う者であるという点に関わっているのである (cf. Resp. X, 601b-602b)。したがって、両者は別の存在であるといわなくてはならない。cf. 神崎 45.

(7) ソクラテスが、みずからの本性説をクラテュロスの本性説と同一のものであるかのような語り方をしているのは事実である (390d6-e4)。しかし、我々は両者を同一視する必要はないように思われる。というのは、ここでソクラテスが展開している本性説が名前の使用を巡るものであり、関係Φを巡るものでない以上、両説における「本性的」ということの意味も、おのずから異なってくるからである。ソクラテスは、この「本性的」ということばの両義性を利用し、自分がクラテュロス説に同意するかのよう装っているのだと理解することができる。

(8) クラテュロス説の失敗の原因は、「類似性」というおかしな概念を持ち出したところにあると考える論者は多い (Schofield 63-65, Williams 91-2, 神崎 48, Palmer 31-35) が、しかし我々は、むしろこの考え方が、語源分析の議論の中で、クラテュロス

説を記述によって展開することの限界から、これをなされた説明するものとして自然なかたちで登場してきたという事実を注目すべきであらう (421c12-422e6)。このことは、記述による説明と類似性による説明が、その発想において本質的に同一の種類のものであることを示している。

(9) 確かに表面的には、ソクラテスはクラテュロス説に固執しているように見える (435c2-3)。しかし、それはアイロニーとして理解しうるものであり、我々はこれを額面通りに理解する必要はないように思われる。cf. Schofield 67.

(10) cf. *Phaedrus* 263 a6-b1, *Alcibiades I* 111b11-c3.

文献表

- Bestor, T., "Plato's Semantics and Plato's "Cratylus"", *Phronesis* 25 (1980), 306-330.
- Kretzmann, N., "Plato on the Correctness of Names", *American Philosophical Quarterly* 8 (1971), 126-138.
- Palmer, M.D., *Names, References, and Correctness in Plato's Cratylus*, New York, 1989.

Schofield, M., "The dénouement of the *Cratylus*", *Language and Logos* (M. Schofield & M. Nussbaum (eds.)), Cambridge U. P., 1982, 61-81.

Silverman, A., "Plato's *Cratylus*: The Naming of Nature and the Nature of Naming", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* X (1992), 25-71.

Weingartner, R. H., "Making sense of the *Cratylus*" *Phronesis* 15 (1970), 5-25.

Williams, B., "Cratylus's Theory of names and its refutation", *Language and Logos* (M. Schofield & M. Nussbaum (eds.)), Cambridge U. P., 1982, 83-93.

神崎 繁「ある前提—『クラテュロス』における「正しき」*ὀρθότης* とその思考の帰趨—」『西洋古典学研究』32 (1984), 41-53.

中畑正志「言語・意味・対象—『クラテュロス』におけるプラトンの言語哲学—」『哲学研究』551 (1985), 73-116.